

『インタビューの社会学』を読み直す

——書評とリプライを手がかりに——

井出 裕久

はじめに

社会調査に関する書籍には、調査結果をまとめた著作だけでなく、社会調査の方法や歴史について論じたものも少なくない。こうした社会調査論は、社会調査の方法やプロセスを対象化することによって、それを明示的な知識として次世代に伝達できる。それだけでなく、研究者たちが自らの調査活動に対して意識的なまなざしをむけて吟味することをとおして、方法を洗練しよりよい調査へと結びつけられる。この点で社会調査論は、初学者にも専門家にとっても大きな意義を有している。

社会調査論がその意義を十分に発揮するためには、それが実際の社会調査の方法や過程を的確に捉えていることが不可欠の前提である。しかしながら、社会調査論の記述と実際の社会調査とのあいだに齟齬が存在することもある。戦後日本の社会学教育において、ある時期までもっともひろく読まれた社会調査の教科書として、福武直『社会調査』（1958, 補訂版 1984）があげられる。そこでは社会調査の研究法は、統計的方法と事例研究法とに分けられ、前者は「定量的な方法であるから、その論理が客観的妥当性をもち、フォーマルな方法として客観的な分析にたえる強み」をもつものに対して、後者の「論理は、ある意味において主観的であり……インフォーマルな方法である」（福武 1958: 50）と述べられていた。しかし現在では、これに同意しない社会学者も少なくないだろう。統計的方法によって行なわれる調査とそれに関する『社会調査』の記述とに大きな齟齬があったのである¹⁾。自らの営みを文字どおり十全に対象化して明示することは困難であるとしても、社

会調査論と実際の社会調査との齟齬を埋めるたゆまない努力が私たちには求められている。

1970年代後半の私が学部学生だったときの「社会調査」の講義のテキストは、福武の『社会調査』と『統計調査』（西平 1957）の2冊であった。社会調査といえば、何といても量的調査が中心であった。ところが、最近では「若手研究者たちが量的調査よりも質的調査に向かうことが多く」（野口 2015: 112）になったといわれる。これは、1人の研究者の実感にとどまらない。『社会学評論』（日本社会学会）と『ソシオロジ』（社会学研究会）は、国内の代表的な社会学雑誌である。1950年代以降にこの2つの雑誌に掲載された論文の方法（研究分野）のトレンドを分析した研究によると、1980年代頃までは理論的な方法が支配的で増加をつづけていた。その後、質的方法が増加し、2010年代にはもっとも人気のある方法となったという（Taromaru 2019）。

こうした動向のなかで、桜井厚の『インタビューの社会学』（2002）は、かつての福武の著書と同様に現在の社会調査の世界で重要な著作である。生活史研究、ライフヒストリー／ライフストーリー研究を語るときに、同書を避けては通れない。出版直後に複数の書評に取りあげられただけでなく、その主張を批判的な観点から取りあげた論考も発表された（足立 2003; 鶴田・小宮 2007）。出版後十数年を経た現在でも、彼が同書で提唱した対話的構築主義は、単なる賛否だけでなく、さまざまに議論されている（石川・西倉 2015; 岸 2015; 西倉・朴・岸 2018; 関水 2019）。

私も出版直後に同書を取りあげて書評論文（井出 2002）を書いたが、本稿では『社会学評論』に掲載された小林甫の書評論文（2004）を取りあげる。そこで指摘された1つの疑問に注目し、桜井のリプライ（2004）を検討することから始めて、『インタビューの社会学』を読み直すこととしたい。対話的構築主義について議論する前提となる理解を共有するために不可欠な作業であるだけでなく、対話的構築主義は何を行なうのか、ひいては社会学研究は何を行なうのかを探究するためにも重要な作業だと考える。

1. 桜井厚と『インタビューの社会学』

まず、日本のライフヒストリー／ライフストーリー研究における桜井厚および『インタビューの社会学』の位置づけをみておきたい。社会学における生活史（life history）研究の先駆としては、米国における W. I. トマスと F. ズナニエツキの『ポーランド農民』（Thomas and Znaniecki 1918-20）が、そして日本では中野卓の『口述の生活史』（1977）があげられる。生活記録として、前者ではおびただしい数の手紙と1人のポーランド移民の自伝が用いられ、後者では題名にも示されているようにインタビューを収めた録音テープが使用された。

中野卓は1980年秋に開催された第53回日本社会学会大会で「個人の社会学的研究について」と題する会長講演を行なった²⁾。そこで中野は、「質問紙等を用い量化測定的に扱えようとしても元々無理であって、そういう調査方法では断念を強いられるほかないものを、「科学性」において劣るとの非難を覚悟の上で、それも大切と考え、とりががすまいとしての企てなのです」（中野1981: 5）とその意義を説いた。現在では考えられないかもしれないが、この悲痛ともいえる中野のこぼれに、生活史をはじめとする質的調査に対する当時の評価がよくあらわれている。

中野が「個人の社会学的研究」としてその重要性を指摘した生活史研究は、世代を超えて継承発展させられてきた。桜井はその発展を牽引しつづけてきた。1981年末に「第一回生活史研究会」が開かれるが、その研究会の常連に桜井が呼びかけて編まれたのが『ライフヒストリーの社会学』（中野・桜井編1995）である。「現在ではライフヒストリー研究における必読文献にもなっている」（石川2015: 251）と評される。翌年に出版された『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』（谷編1996）は、訳書を除けばわが国で初めてのライフヒストリーの教科書とされる（谷編1996: iv）。桜井はそこにも論考（桜井1996）を寄せている。

桜井は、その研究経歴のほとんど最初からライフヒストリー研究に携わり、日本においてその歴史をつくり、常に重要な位置を占めてきた。被差別部落における実際的な調査研究を積み重ねてきただけでなく、方法論的

な議論にも初期から目配りしてきた。大学院博士課程在学中にA. シュッツの著作集第2巻の第II部を訳出 (Schutz 1964=1980) し、巻末に「A・シュッツの基本概念と生活史」(桜井 1980) を付している。生活史研究の嚆矢とされる『ポーランド農民』の部分訳 (Thomas and Znaniecki 1918-20=1983) とこれに対するH. ブルーマーによる「評価」論文の翻訳 (Blumer 1939=1983) とを1冊に編み、さらにはK. プラマーの『セクシャル・ストーリーの時代』(Plummer 1995=1998) も翻訳した。その桜井が自らの方法論的立場を明確にしたのが『インタビューの社会学』である。

同書の成り立ちは以下のとおりである。「はしがき」によれば、もともとは「ライフヒストリー法を実践的に利用する際の手引き書になるはずだった」(桜井 2002: 8)。しかし執筆過程で「そこからしだいにずれて、その前提となる方法論的な認識枠組みを、おもに私のフィールド体験やインタビュー・データを用いながら記述していくことになった」(桜井 2002: 9) という。このようにして成立した同書の最初の章で桜井は、ライフヒストリー研究のアプローチを、実証主義アプローチ、解釈的客観主義アプローチ、対話的構築主義アプローチの3つに整理した。それぞれのアプローチはつぎのように説明された。

実証主義アプローチは、「ライフヒストリーが科学的で客観的でなければならないとする規範をバックグラウンドにしている」(桜井 2002: 15)。典型は、シカゴ学派の『ジャック・ローラー』(Shaw 1930=1998) である。このアプローチによるライフヒストリーの構成ステップは、「仮説検証型の量的調査法の手法に類似している」(桜井 2002: 18)。「ライフヒストリーを演繹的な視点で仮説検証的に読み、主体の行動を因果的に説明するのは、人生に理性と秩序を見る合理性を背景に、唯一にして「ほんとうの」ライフヒストリーを構成しようとするからである」(桜井 2002: 19)。「社会学者こそが社会と生活を説明するにたる十分な知識をもっているというのが、実証主義アプローチの暗黙の前提であった」(桜井 2002: 23)。

解釈的客観主義アプローチは、「制度的、規範的現実を表象する意味世界があらかじめ存在することが語りの成立の前提」とする。そして、「帰納論的な推論を基本としながら、語りを解釈し、ライフストーリー・インタ

ビューを重ねることによって」「さまざまな語りに通底する基調音である社会的現実¹にせまろうとする」(桜井 2002: 25)。このアプローチの代表的な研究事例は、「パン製造業で働く雇い主、被雇用者、徒弟などにインタビュー」(桜井 2002: 27) したベルトーらの研究 (Bertaux and Bertaux-Wiame 1981=2003) である。

3つめの対話的構築主義は、この名称は桜井による「造語」であり、彼の拠って立つアプローチである。「エスノメソドロジー、構築主義、語り(物語)論などと多くを共有する」(桜井 2002: 10)。「ライフストーリー・インタビューでは、語り手の発話を阻害しないように配慮しつつ、比較的自由な会話が行われる。経験した出来事や社会過程の主観的意味を把握するためには、語り手自身の概念ないしカテゴリーの定義や語りのコンテキストを尊重する必要があるからである」(桜井 2002: 28)。このアプローチでは、語り手を「たんなる^{インフォーマント}情報提供者」(桜井 2002: 30) とは考えない。その語りは、「語り手とインタビュアーとの相互行為を通して構築され」(桜井 2002: 28)、「インタビューの場で語り手とインタビュアーの両方の関心から構築された対話的混合体にほかならない」(桜井 2002: 31)。このような見方からこのアプローチでは、「語り手が「何を語ったのか」という語りの内容にややもすると関心が集中するが、その一方で、「いかに語ったのか」と、語りの様式にも注意をほらう」(桜井 2002: 29) とされる。

『インタビューの社会学』ではその最初に、以上のライフヒストリー研究のアプローチの見取り図が示されたうえで、対話的構築主義の「方法論的な認識枠組み」が展開される。

2. 書評論文とリプライ

『社会学評論』に掲載された小林甫の論考(2004)は「書評論文」に分類されている。実際、単なる書評ではなく、対象書の全体を引き受けて本格的に論じている。小林はこの論考の意図について、彼自身の研究関心である「日本の労働文化研究……のヒント」を『インタビューの社会学』と『屠場文化』

(桜井・岸編 2001)に「見出したい」(小林 2004: 367)という。そして、『インタビューの社会学』を細かな点にも注意を払って読み³⁾、その全体構造をつかみだして要点を説明しながら、著者の桜井にいくつかの疑問を呈した。その関心の所在と議論の内容からして、単なる書評を越えた緻密な検討がなされているといえる。

念のためにつけくわえれば、小林が、『『屠場文化』という作品を支える方法論に強い関心を抱いている」(小林 2004: 367)と述べて、論文タイトルにはないこの著作も取りあげたのは納得できることである。『屠場文化』の「序」には、同書が桜井たちが4年間にわたって行なってきた調査をもとにした作品であることだけでなく、「ライフヒストリー・インタビュー」といわれる方法によって「屠場にかかわりながら現在を生きる人びとの語りをつぶさに聞くことによって編まれている」(桜井 2001: 10)として、その方法についてつぎのように丁寧に説明されている。

「個人が自己の人生の経験を語る時、語り手は自分の経験に主観的意味をあたえる。ライフヒストリー・インタビューは、この主観的意味を重視するところに大きな特徴があるが、それをどのように理解するかとなると、およそ三つの異なる考え方がある」(桜井 2001: 10)。桜井はこのように述べて、1つめの「実証主義」から始めて、解釈的客観主義、対話的構築主義の用語こそ用いられないが、『インタビューの社会学』でそのように呼ばれることになる⁴⁾ 2つの考え方を順に簡潔に説明する。そして、同書では「こうした考え方が混在して利用されている」と書く。「歴史的な文献資料にあたって、それぞれのテーマについて概説した」第I部1章と第II部1章は「実証主義的な色彩が濃い章」である。しかし桜井によれば、「私たちの本来の意図は、語りを重視し、人びとが経験を語ることによって紡ぎだされる意味を解釈することによって屠場の意味世界を構築することであった」。したがって、それぞれの部の2章以下が桜井らが「とりわけ注目し描き出そうとした世界」だという。つまり、「私たちの立場は、どちらかといえば前述の第二、第三の考え方にのっとっている」とされるのである(桜井 2001: 11)。

このように、すでに『屠場文化』で『インタビューの社会学』で提示される3つの方法が示され、「どちらかといえば」としながらも解釈的客観主義、

対話的構築主義に「のっっている」とされる。以上の記述につづけて桜井は、「前述の第三の考え方からは、現在のインタビューの場において語りが構築され、現在の時点から過去の出来事が解釈されて語られることがわかる」（桜井 2001: 12）と書き、「実証主義の考え方は過去の唯一の〈事実〉や〈真実〉を検証することに躍起になるが、私たちは、むしろ人びとが現在の時点で何を〈現実〉と考えているかを知ろうとする。語り手が過去の事実として〈何〉を語ったかではなく〈どのように〉語ったか、こそが重要なのだ」（桜井 2001: 13）とも述べる。こうした記述から、『屠場文化』では「第二、第三の考え方」のうちでも後者にウエイトが置かれていると受けとつても決して不都合ではない。滝野正樹（2003）は、「フィールドワークや質的調査法」の「方法論的基盤を再考する」ものとして『インタビューの社会学』と『屠場文化』を取りあげ、前者を「理論編」、後者を「実践編」（滝野 2003: 135）と位置づけている。

(1) 実証主義アプローチの工夫としての「〈脇固め〉」

小林は書評論文で大きく3つの疑問を呈するが、本稿ではその最初の「〈脇固め〉」に関する疑問を取りあげる。これに注目するのは、小林とはやや別の角度からながら私自身も疑問を抱くからでもある。

この記述は、『インタビューの社会学』の先にみた実証主義アプローチに関する部分にある。実証主義アプローチは、「実証主義アプローチ」「ライフヒストリーの構築」「シカゴ学派の事例」「調査の目的と対象」の4つの項にわたって論じられる。最初の「実証主義アプローチ」では、ライフヒストリー法は非科学的な研究法とみなされてきた一方で、その研究者はライフヒストリー法を「いかに科学的にするかに腐心してきた」（桜井 2002: 16）と述べられる。そして、2つめの「ライフヒストリーの構築」で実証主義アプローチによるライフヒストリーの構成ステップが、「仮説検証型の量的調査法の手法に類似している」（桜井 2002: 18）ことが指摘されたあとに、「〈脇固め〉」をめぐる記述があらわれる。重要な箇所なので、長文を厭わずに引用しよう。

このアプローチでは、客観的な出来事や社会構造と、それに対する行

為者の主観的な規定という二分法的な考え方が前提とされている。重要なのは、それらの相互関係である。もちろん、行為者の主観的な見方は社会変動や時間の経過によって変わるわけだから、客観的な出来事や社会構造の影響についての個人の記憶はあいまいで、当事者からはかならずしも一貫した説明がなされるとはかぎらない。しかし、調査研究者は、ライフヒストリーについて、正しい、真実の、妥当な、首尾一貫した説明と解釈がなされなければならないとする考えを前提にしているから、行為者が「なぜ」そのような特定の行動をとったのかという因果的説明がライフヒストリーの構成にとって重要な課題となる。ライフヒストリーを演繹的な視点で仮説検証的に読み、主体の行動を因果的に説明するのは、人生に理性と秩序を見る合理観を背景に、唯一にして「ほんとうの」ライフヒストリーを構成しようとするからである。ライフヒストリーの妥当性を高めるためには、調査研究者が行ってきた基本的なことは、「対象事例を社会的に位置づけるための〈脇固め〉」（水野 1986: 162）であった。他者からの聞き取りや記録文書などの資料を補うことによって、ライフヒストリー作品の妥当性を高めようとしてきたのである。この工夫こそ、ライフヒストリーの実証主義アプローチそのものである。ライフストーリーの主体を、あくまでも研究対象として客体化することによって、ライフヒストリー研究は主体を社会的に理解可能な世界に位置づける合理的営みとなるのである。（桜井 2002: 19）

この部分を読んで私は、2つの箇所違和感を覚える。1つめは、最初の部分である。桜井は、「客観的な出来事や社会構造と、それに対する行為者の主観的な規定」の「相互関係」が重要だという。だが、その「二分法的な考え方」自体は問題にしない。しかし、たとえば本書の別の箇所では、プラマー（Plummer 1995=1998）にもとづいて「ストーリーが産み出されるには、それを受け入れてくれるコミュニティがなければならず、コミュニティそれ自体も、同時にストーリーの語りをとおして構築される」と両者を「ダイナミックな関係」（桜井 2002: 260）と捉えている。これは、上記の「二分法的な考え方」と親和的だろうか。もう1つは、うへの引用では「〈脇固

め」は、「他者からの聞き取りや記録文書などの資料を補うこと」として使われている⁵⁾。このような意味での「〈脇固め〉」は、どのような調査でも行なわれるのではないだろうか。

さて、小林は、この長い段落をコンパクトにまとめながら、「〈脇固め〉」について以下のように問いかける⁶⁾。

実証主義アプローチとは「科学的で客観的でなければならないとする規範」(15)に基づき、「客観的な出来事や社会構造」から「それに対する行為者の主観的な規定」を因果的／演繹的に説明する、**ライフ・ヒストリー**のアプローチである(19)。対象事例の社会学的位置づけのためには「〈脇固め〉」がなされるが、桜井は「この工夫こそ、ライフ・ヒストリーの実証主義アプローチそのもの」と評する(19。だがこれは再考を要する。桜井・岸『屠場文化』の歴史社会学的分析は“生きている”と思うからだ)。(小林 2004: 370)

小林が「再考」の必要性を指摘するのは、「この工夫こそ、ライフ・ヒストリーの実証主義アプローチそのもの」と評すること、つまり「対象事例の社会学的位置づけのために」行なわれる「〈脇固め〉」が「実証主義アプローチそのもの」だという主張である。その根拠として小林があげるのは、「桜井・岸『屠場文化』の歴史社会学的分析は“生きている”こと、つまり、『屠場文化』の「実証主義的色彩が濃い」と桜井がいう章以外でも「〈脇固め〉」が単になされているだけでなく、それが十分に有効だということである。

(2) 対話的構築主義と「〈脇固め〉」

小林の認識と指摘の趣旨は、桜井によつて的確に把握されている。「リプライ」で桜井は、『屠場文化』における「語りを聞く方法」が「解釈的客観主義」であること(小林 2004: 371)⁷⁾は、小林の認識としてだけでなく、彼自身も「大筋で……認めている」と述べる(桜井 2004: 375)。だが、小林の指摘に対して桜井は、「しかし」と逆説の接続詞で応じる。

しかし、補助的資料（文書あるいは口述）が何のために使われているのか、を見極めておく必要はあるだろう。……これまでの真偽や信憑性のために利用される補助的資料はややもすると別の声を封殺しがちではなかったか。「〈脇固め〉」とは、理解や解釈を促進し、むしろ多声性を保証することにつながらなくてはならない。（桜井 2004: 376）

小林による再考の必要性、つまり「〈脇固め〉」が実証主義アプローチだけでなく解釈的客観主義アプローチにおいても効果的に用いられていることを桜井は否定しない。そうでありながら、「補助的資料」が使われる目的を「見極めておく必要」があるという。語りの内容の「真偽」を判定するために文書資料を用いる実証主義アプローチと複数の「口述」を積み重ねて「信憑性」を高めようとする解釈的客観主義アプローチという2つのアプローチは、「別の声を封殺しがちではなかったか」。しかし、「〈脇固め〉」とは、理解や解釈を促進し、むしろ多声性を保証することにつながらなくてはならない。『屠場文化』では、「補助的資料は、ただそのために利用しているつもりである」。桜井はこのように答えた（桜井 2004: 375-6）。

これまでの議論を改めて整理してみよう。『インタビューの社会学』で桜井は、ライフヒストリー研究の方法論を従来の「実証主義アプローチ」「解釈的客観主義アプローチ」と自らの「対話的構築主義アプローチ」の3つに分類した。そして、「〈脇固め〉」について、「この工夫こそ、ライフヒストリーの実証主義アプローチそのものである」と否定性を刻印する⁸⁾。このことが小林による指摘の前提である。だからこそ小林は、端的に「これは再考を要する」と指摘したのだ。ところが、リプライによれば、「〈脇固め〉」の使用は、「多声性を保証」するという目的によって肯定される。『屠場文化』において「多声性を保証」するのは、「語りの多声性を積極的に保証しようとした」「第三の考え方」（桜井 2001: 11）、つまり『インタビューの社会学』で対話的構築主義と名づけられる考え方にほかならない。このようにしてみると、「〈脇固め〉」は、実証主義アプローチと小林が指摘した解釈的客観主義アプローチだけでなく、対話的構築主義アプローチにおいても「多声性を保証する」という意図のもとに使用されていることになる。

(3)『インタビューの社会学』における「〈脇固め〉」

前節では、桜井の理路をたどり、その帰結として「〈脇固め〉」は、彼のいうライフヒストリー研究の3つのアプローチのいずれでも用いられており、実証主義アプローチを特徴づけるとはいえないと結論づけた。本章の最初の節で触れた私の2つめの違和感は解消されたことになる。ただ、前節でみた小林と桜井のやりとりは、直接には『屠場文化』をめぐるものである。『インタビューの社会学』でも、対話的構築主義アプローチとして「〈脇固め〉」が行なわれているだろうか。

この点を確認するためには、『インタビューの社会学』から、どのような事例を取り上げるのが適切だろうか。対話的構築主義は何を目指し、何に留意するのか、つまりその眼目は何か。以下の引用をもとに、それにふさわしい事例は何かを確認したい。

語りの妥当性については、どのように考えたらよいのだろうか。人生のある時期での個人的な語りの語られ方は、過去や現在の経験、そして予想される未来を当人がどのように理解しているかの、内的に一貫した解釈として表現されたものである。このことは、語りの一部が語りのほかの部分と矛盾をきたさないということである。……このような内的一貫性は、語りの最初とあとでストーリーに矛盾やずれがあることに気づけば、インタビュアーも語り手自身も双方がチェックをして修正したり追加的な説明を補ったりすることで、継起順序や方針などの一貫性を確保することができる。こうしたインタビュー過程における語りの「内的一貫性」に対して、語り手のことや語られた出来事などについて調査者があらかじめ知っていることやこれまでの他の人の語りとは矛盾することがある。それは「外的一貫性」がないことを意味するが、それだからといって語りに妥当性がないとはいえない。なぜなら、私たちはかならずしも「外的基準」をもつ「歴史的眞実」や「個人史的現実」を求めているのではなく、むしろ「語りの眞実」(Spence)や「自伝的眞実」(クラパンザーノ)のもつ「内的一貫性」にこそ、まず関心をおいているからである。(桜井 2002: 201-2)

桜井はまず、語りの性質を簡潔に規定した上で、その「妥当性」について「外的一貫性」と「内的一貫性」とに分けて説明する。前者の基準にもとづいて「バイアスを取り除いたりすることができるのは、「個人史的現実」に対応する語りである」（桜井 2002: 203）。対話的構築主義が求めるのは、「外的基準」をもつ「歴史的眞実」や「個人史的現実」ではなく、「語りの眞実」や「自伝的眞実」であり、「内的一貫性」に関心を置いていると強調する。この「自伝的眞実」について桜井は、「おそらく実際には決して起こりえないことだけれども、なお語りとしては眞実であると見られるもの」とクラパンザーノの説明（Crapanzano 1980=1991）を参照するとともに、「奥のオバアサン」にのりうつた「お稲荷さん」の話（中野 1977）などを例示している（桜井 2002: 202）。

この説明にしたがうと、個人史的現実の語りは、「〈脇固め〉」が用いられるが、それは対話的構築主義が求めるものではない。ここで私たちが『インタビューの社会学』から取りあげるに値するのは、自伝的眞実の語りである。

このような事例として、先の引用の直前の項で紹介される「地蔵八反」の伝承がある（桜井 2002: 195-201）。伝承の内容を紹介したうえで、そこで「〈脇固め〉」が行なわれているか否かを検討しよう。

中山道沿いに住んでいたむらの先祖の娘が、大名行列で通りかかった殿様に見初められて江戸で仕えた。その後、その娘が亡くなったときに亡骸が届けられ、八反の田んぼをつけて地蔵を守ってくれといわれた。その地蔵と田んぼをもらった際に、証拠となる証文を受けとった。ところが、ほかの地区から養子にきた区長が、伝承を知らないうえに字が読めなかったので、証文を粘土製のこたつの補修に使ってなくしてしまった。証文がないために田を隣むらにとられてしまった。

この伝承は、つぎの手順で記述される。まず、この伝承の概要と「恥というとなんやけど」と評価を最初に語りインタビューアの興味をそそったAさんのごく短いトランスクリプトが示され、つぎに、詳しい内容を語ってくれたBさんの2ページちかいトランスクリプトと追加的な要約が記述される。そして、「語り手は、いつごろの話か、どの程度たしかな話かもはっきりしないと断りながらも、実際にあった話として語っている」（桜井 2002:

198) と説明される。ところが、2つの古文書によって、「この物語が事実であることは明確に否定」(桜井 2002: 198) される。しかし、「重要なのは、この物語が事実か否かにあるのではない。なぜこの伝承が生まれて人びとに語り継がれてきたのかということである」(桜井 2002: 199) と述べて桜井は、Bさんの語りのつづきのトランスクリプトを提示し、さらに、「別の人」(桜井 2002: 200) の同様の発言も紹介して、証文をなくしてしまったために隣むらに田をとられてしまったという結末にすすむ。そして最後に、この伝承に込められた意味にかかわるCさんの2つの短いトランスクリプトが示されて、この項はつぎのように結ばれる。

この語りがもっとも意義をもつのは、〈物語世界〉の内容というよりは世代を異にする聞き手に対する「教訓」や「激励」としてである。語り手と聞き手の関係を抜きにして、語りの解釈が成立しえないことを、ここでの伝承の語りのみごとに例証しているのである。(桜井 2002: 201)

この引用の最後の1文に端的に示されているように桜井は、「地藏八反」の伝承に関する記述を対話的構築主義の妥当性を「例証」するものと位置づける。そこでは、以上にみたとおり複数の人の語りを積み重ねる「〈協固め〉」が行われている。同時に、古文書から導かれる、その伝承が「事実と反する」ことをいわば梃子にして、「人びとがこの伝承に込めている意味」へと視点を効果的に転じている。たしかに、「〈協固め〉」によって、「理解や解釈を促進し」、従来の語りの聞き方では捉えられなかったであろう意味に光があてられている。

おわりに

書評とリプライを手がかりに『インタビューの社会学』を読み直した。再読して、とまどいのようなものを覚えている。本稿では小林とともに、桜井は「〈協固め〉」こそ実証主義アプローチを特徴づけるものとしていると捉え

た。これは、私たちの誤読だったのだろうか。先に引用した段落の当該箇所を読むかぎりでは、小林のようにしか受け取れない。他方で、小林から指摘を受けて桜井が説明を変えたともみえない。

ここで、「〈協固め〉」を含む桜井の引用にもう1度戻りたい。その最後で彼は、つぎのように書いていた。「ライフストーリーの主体を、あくまでも研究対象として客体化することによって、ライフヒストリー研究は主体を社会的に理解可能な世界に位置づける合理的な営みとなるのである」。1つの文に2回も「主体」を使い、「ライフストーリーの主体を……研究対象として客体化」し、「社会的に理解可能な世界に位置づける」という仕方でも、その「主体」としてのあり方を奪ってしまっていると主張していた。つまり、語り手の「声を封殺」するということだ。このようにみると、すべての「〈協固め〉」ではなく、「声を封殺」する「〈協固め〉」の否定が桜井の真意だったのかもしれない。

『インタビューの社会学』には、疑問や違和感が抱かれ、著者の意図を把握しがたい箇所が少なくない。これらについてさらに1つひとつ吟味検討していくことが、対話的構築主義について議論するために、まず必要な作業だと考えている。

註

- 1) 私たちがかつて検討したように、「理論に導かれ」「明示化され、標準化された方法」によって行なわれるはずの統計的方法は、じつは、〈インフォーマルで主観的な方法〉という支柱を必要不可欠にして」（井出・張江 1998: 217）おり、統計的調査法はその論理に照らして客観的だとはいえない。
- 2) 『社会学評論』の小特集「社会学と社会調査」の1篇として掲載される際に、標題は「特輯企画に合わせて、「研究」を「調査研究」と改め」（中野 1981: 4）られた。
- 3) たとえば、注の引用を原文にさかのぼって確認して桜井の誤記を指摘している（小林 2004: 370）。
- 4) 前者の用語は桜井（1993: 107）ですでに用いられている。

- 5) 引用元が示されているように、「〈協固め〉」は、水野節夫が「生活史法の社会学的可能性をめぐる問題」(水野 1986: 158)を検討する際に用いた概念である。彼は、それまでに行なわれてきた社会学的調査研究について、対象事例が「社会学的に有意なデータであるという点を論証するために」行なわれてきた工夫——「社会学的信憑性 (sociological plausibility) を確保するための工夫」(水野 1986: 158)を、対象者が単数の場合と複数の場合に区別して検討した。そして、単数の場合の工夫(同業者もしくは関係者による対象者の発言のチェック、対象者と同じ社会的属性をもった人びとに関する情報の収集、対象者の生きている(た)時代状況や社会状況を照らし出すような情報の提示)を「対象事例を社会学的に位置づけるための〈協固め〉」(水野 1986: 162)と名づけた。対象者が複数の場合については、このことばは使われておらず、「解釈的客観主義の代表的な研究事例」として桜井が紹介するベルトーラ (Bertaux and Bertaux-Wiame 1981=2003) の工夫は、「ライフ・ヒストリーの重ね合わせ」(水野 1986: 163)と水野は呼んだ。したがって、厳密には「〈協固め〉」の用法は水野と桜井・小林とではやや異なるかもしれないが、ここでは、桜井・小林の使い方にしている。
- 6) 小林 (2004) からの引用部分の () で囲まれたアラビア数字は『インタビューの社会学』の掲載ページを示す。
- 7) 小林は、『『屠場文化』という成果を挙げえた要因』として、「解釈的客観主義」の「語りを聞く方法」と対話的構築主義の「語りの生み出される過程、文脈に注目する手法」(11)との2つに言及している(小林 2004: 371)。
- 8) 『インタビューの社会学』で「〈協固め〉」の語が使われるのは、実証主義アプローチについて書かれたこのページ(桜井 2002: 19)だけである。

参考文献

足立重和, 2003, 「生活史研究と構築主義——「ライフストーリー」と「対話的構築主義」をめぐる」『社会科学論集』40・41: 219-31.

Bertaux, Daniel and Isabelle Bertaux-Wiame, 1981, "Life Stories in the

Bakers' Trade," Bertaux, Daniel ed., *Biography and Society: The Life History Approach in the Social Science*, SAGE, 169-189. (小林多寿子訳, 2003, 「パン屋のライフストーリー」ダニエル・ベルト『ライフストーリー——エスノ社会学的パースペクティブ』ミネルヴァ書房、189-216.)

Blumer, Herbert, 1939, *Critiques of Research in the Social Sciences I: An Appraisal of Thomas and Znaniecki's The Polish Peasant in Europe and America*, Social Science Research Council, 24-98. (桜井厚訳, 1983, 「社会科学における調査研究批評 I——トーマス、ズナニエツキ著「ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民」の評価」『生活史の社会学——ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』御茶の水書房、169-241.)

Crapanzano, Vincent, 1980, *Tuhami: Portrait of a Moroccan*, University of Chicago Press. (大塚和夫・渡部重行訳, 1991, 『精霊と結婚した男——モロッコ人トゥハーミの肖像』紀伊國屋書店.)

福武直, 1958, 『社会調査』岩波書店.

——, 1984, 『社会調査 補訂版』岩波書店.

井出裕久, 2002, 「書評論文 社会調査と社会調査論のはざままで」『年報 社会科学基礎論研究』1: 188-193.

井出裕久・張江洋直, 1998, 「方法と客観性——統計的調査法の隠された基盤」西原和久・張江洋直・井出裕久・佐野正彦編『現象学的社会学は何を問うのか』勁草書房, 190-224.

石川良子, 2015, 「あとがき」桜井厚・石川良子編『ライフストーリー研究に何ができるか——対話的構築主義の批判的継承』新曜社, 249-251.

石川良子・西倉実季, 2015, 「ライフストーリー研究に何ができるか」桜井厚・石川良子編『ライフストーリー研究に何ができるか——対話的構築主義の批判的継承』新曜社, 1-20.

岸政彦, 2015, 「鉤括弧を外すこと——ポスト構築主義社会学の方法論のために」『現代思想』43(11): 188-207.

小林甫, 2004, 「〈書評論文〉桜井厚著『インタビューの社会学——ライフ

- ストーリーの聞き方』『社会学評論』219: 367-373.
- 水野節夫, 1986, 「生活史研究とその多様な展開」宮島喬編『ライブラリ社会学=10 社会学の歴史的展開』サイエンス社, 147-208.
- 中野卓編著, 1977, 『口述の生活史——或る女の愛と呪いの日本近代』御茶の水書房.
- , 1981, 「個人の社会的調査研究について」『社会学評論』125: 2-12.
- 中野卓・桜井厚編, 1995, 『ライフヒストリーの社会学』弘文堂.
- 西平重喜, 1957, 『統計調査法』培風館.
- 西倉実季・朴沙羅・岸政彦, 2018, 「〈2016年度先端社会研究所第6回先端研セミナー（共催：社会調査協会）講演録〉ライフストーリーとライフヒストリー——『事実』の構築性と実在性をめぐって」『関西学院大学先端社会研究所紀要』15: 43-85.
- 野口裕二, 2015, 「編集後記」『N：ナラティヴとケア』6: 112.
- Plummer, Kenneth, 1995, *Telling Sexual Stories: Power, Change and Social Worlds*, Routledge. (桜井厚・好井裕明・小林多寿子訳, 1998, 『セクシャル・ストーリーの時代——語りのポリティクス』新曜社.)
- 桜井厚, 1980, 「A・シュッツの基本概念と生活史」アルフレッド・シュッツ『現象学的社会学の応用』(桜井厚訳), 御茶の水書房, 311-333.
- , 1993, 「方法論としての生活史」松平誠・中畠邦編著『講座生活学第3巻 生活史』光生館, 89-120.
- , 1996, 「ライフヒストリー・インタビューにおけるジェンダー」谷富夫編『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社, 207-233.
- , 2001, 「序 屠場が語られるとき」桜井厚・岸衛編『屠場文化——語られなかった世界』創土社, 5-18.
- , 2002, 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- , 2004, 「『インタビューの社会学』書評論文リプライ」『社会学評論』219: 374-377.

- 桜井厚, 2012, 『ライフストーリー論』 弘文堂.
- 桜井厚・岸衛編, 2001, 『屠場文化——語られなかった世界』 創土社.
- Schutz, Alfred, 1964, *Collected Papers II, Studies in Social Theory*, edited and introduced by Arvid Brodersen, Martinus Nijhoff, The Hague. (桜井厚部分訳, 1980, 『現象学的社会学の応用』 御茶の水書房.)
- 関水徹平, 2019, 「ライフストーリー研究と複数の事実性——学知と日常知を問い直す方法論としての可能性」 栗原亘・関水徹平・大黒屋貴稔編著『知の社会学の可能性』 学文社, 287-306.
- Shaw, Clifford R., 1930, *THE JACK-ROLLER: A Delinquent Boy's Own Story*, The University of Chicago Press. (玉井眞理子・池田寛訳, 1998, 『ジャック・ローラー——ある非行少年自身の物語』 東洋館出版社.)
- 滝野正樹, 2003, 「書評論文『インタビューの社会学』(桜井厚著)『屠場文化——語られなかった世界』(桜井厚・岸衛編)」『文化人類学研究』4: 135-142.
- 谷富夫編, 1996, 『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』 世界思想社.
- Tarohmaru, Hiroshi, 2019, “The Trends of Research Methods in Japanese Sociology, 1952-2018,” the 11th CDCS Seminar: Text Mining for Analyzing Research Communities: Sociological Topics and Socio-Technical Imaginaries, 人文学オープンデータ共同利用センター (9月25日).
- Thomas, W. I. and F. Znaniecki, 1918-20, *The Polish Peasant in Europe and America*, Richard G. Badger. (桜井厚抄訳, 1983, 『生活史の社会学——ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』 御茶の水書房, 1-168.)
- 鶴田幸恵・小宮友根, 2007, 「人びとの人生を記述する——「相互行為としてのインタビュー」について」『ソシオロジ』 159: 21-36.